［研究ノート］

在学地域への大学生のコミュニティ感覚に関する予備的考察

福田みのり[1)]，中村洋[2)]

1)，2）山陽小野田市立山口東京理科大学 共通教育センター

Preliminary Investigation on the Sense of Community University Students have in the Area where the University is Located

Minori FUKUDA, Hiroshi NAKAMURA

Center for Liberal Arts and Sciences, Sanyo-Onoda City University

要　約

本研究の目的は、在学地域に対する大学生のコミュニティ感覚と、その変化を明らかにする尺度開発に向けた予備的検討を行うことである。そのために、本学の学生 176 名に対して、大学生がそもそも在学地域に対してどのようなイメージを持っているのか、どのような機会に地域と感情的なつながりを持つのか、について質問紙調査を行った。130 名より回答を得て、在学地域への大学生の態度を検討した。

山陽小野田市のイメージとして、「自然環境」に関しては肯定的・中立的な回答例が多かったが、「交通」「道路」「商業施設」「娯楽施設」に関しては「交通が不便」「遊ぶ所が少ない」などの否定的回答が多かった。また、地域とのつながりについては、部・サークル活動の一環であるために、もしくは単位を取得するために、ボランティア活動として地域イベントに参加していると考えられた。さらに、大学生のアルバイト活動は学外の人とのつながりを生み出し、学生の地域への居心地の良さに影響を及ぼしている可能性が示唆された。

これらの結果から、大学生と地域との関係を測定する本学の実態にあわせた指標についての情報が得られた。ただし、アルバイト活動やボランティア活動等で地域の人たちと関わる頻度によりイメージに違いがあるかなど、他の回答との比較については今後の検討課題として残った。今後は本研究に基づき、コミュニティ感覚を分析するための測定尺度を作成する予定である。その尺度を用いて、ボランティア活動、アルバイト活動、地域科目受講などによる大学生の地域コミュニティに対する態度の変容を調査し、分析したいと考えている。

キーワード：コミュニティ感覚，山陽小野田市，イメージ，コミュニティ心理学

KEY WORDS：Sense of Community, Sanyo-Onoda City, Image, Community Psychology

1. 問題

1.1 問題の背景

日本の地方では、人口減少、産業衰退が進行し、それがさらなる人口減少をもたらしている。今後も、都市と地方の格差拡大、地方の疲弊がさらに進むと予想されている[1)]。

日本政府は東京一極集中を是正し、地方の人口減少に歯止めをかけるために、「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を立案した（2014 年閣議決定）。その重要施策の一つが地方大学の活性化である。その具体策として定められた「地方大学等創生 5 か年戦略」では、知の拠点としての大学の研究・教育機能の強化、学生の地元定着促進、地域の企業が求める人材育成を進めることとなっている。政府が 2013 年に打ち出した「国立大学改革プラン」を受け、文部科学省は、2015 年に国立大学の担う役割を発表した[2)]。

そこでは、国立大学全体の 64%（55 大学）を占める大学が、「地域活性化の中核」としての機能を担うこととなった。文部科学省も 2013 年度から COC 事業（Center of Community（地（知）の拠点整備事業）、そして 2015 年度からは、同事業の拡張・後継事業として COC+（プラス）事業を開始した。COC+（プラス）事業では、参加大学の地元就職率を 10% 増加させることが必須の成果目標とされた[3)]。

しかし、その成果を示す指標とされる地元就職は、経済・社会環境に左右されやすい[4)]。また、そもそも地元就職が地域の活性化につながるのかという点において疑問が残る。むしろ地域活性化のためには、地域にある課題に目を向け、課題解決に参加することが重要である。すなわちその「地域」という地理的・社会的環境と人との関係性に注目する視点が必要であると考える。

このように人間の行動を生態学的視点から捉え、すべての行動はその人が置かれている環境（文脈）との相互作用の中で決定されるという考え方に基づく心理学を、コミュニティ心理学という。コミュニティ心理学においてコミュニティとは、「人が依存することができ、たやすく利用が可能で、お互いに支援的な関係のネットワークである」[5)] と定義される。この定義が示すように、「コミュニティ」は、地理的コミュニティだけではなく、人と人との間をつなぐ共通の規範や関心、目標や信頼の感情などを共有することから生まれる関係的コミュニティを重視した概念である。また、コミュニティ心理学は、児童虐待、高齢者、ホームレス、差別、犯罪予防などのコミュニティが抱える課題全体を分析対象とすることから、課題解決のための政策的示唆を与え得る。例えば地方における若者の流出という社会問題は、移住、離職などの人間行動により起こる。その背景としては地方産業の停滞、企業の流出による雇用環境の悪化などの社会的環境がある。このような社会的環境－人間行動－問題行動－問題改善・解決系に影響を及ぼす構成概念の一つとして、コミュニティ感覚（Sense of Community: 以下 SC と略）が位置づけられる[6)]（図１）。

すなわち、大学生の在学地域への SC を調査することが、地域コミュニティの持つ課題の解決や地域の活性化に対する大学の役割を考える糸口となることが期待される。

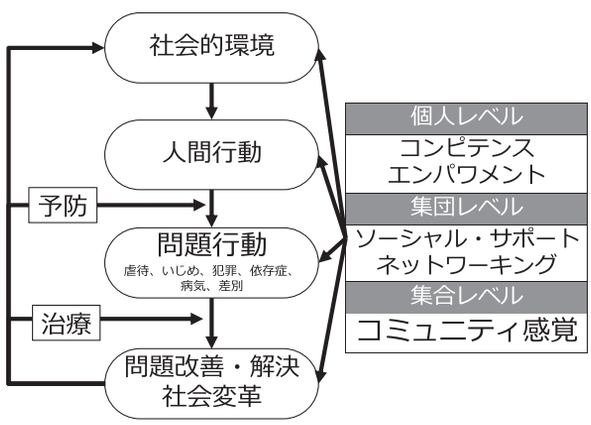

図１　社会心理学的変数とコミュニティ政策
出所：藤原（2005）

1.2 コミュニティ感覚

Sarason(1974) は SC を「他者との類似性の知覚、他者との相互依存関係の認知、他者が期待するものを与えたり、自分が期待するものを他者から得たりすることによって、相互依存関係を進んで維持しようとする気持ち、自分はある大きな、依存可能な安定した構造の一部分であるという感情」と定義している。また、McMillan & Chavis(1986)[7)] は SC を尺度化し、①メンバーシップ、②影響力、③統合とニーズの充足、④情緒的つながりの共有という 4 つの因子から構成されることを明らかにした。つまり、コミュニティが成立するためには、個人を超えた情緒的な結びつきの感覚、すなわち SC が重要となる。

このように考えた時に、はたして大学生は在学地域に対して SC を持っているのか、それはどのようものなのかについて疑問が湧く。これまで、大学生や大学教員の大学コミュニティに対する SC[8-10)]、看護師の職

場コミュニティに対する SC[11]、地域居住住民の地域コミュニティに対する SC[12] などが研究の対象とされ、それらを測定する尺度の開発が行われている。

在学する地域コミュニティに対する大学生の SC についての研究は、大学の授業が学生の地域コミュニティに対する態度に及ぼす影響を分析した既往研究[13]があるが、大学の授業という一要因のみの影響をとりあげており他の要因との関連は明らかではない。一般に、大学生は様々な地域から入学しており、入学当初は在学している地域への SC はそれほど高くないことが予想される。しかしながら、授業科目以外にも地域行事への参加、地域ボランティア活動、部・サークル活動、アルバイト活動など様々な場面において SC が変化することも考えられる。

そこで、このような大学生の地域コミュニティに対する態度を包括的に測定する尺度が必要となる。また、言語レベルで SC を測定する尺度は数多く開発されているが、感性や情緒、イメージといった言語では測り得ないものを測定する尺度の開発も望まれる。これまでに、写真投影法による測定及び分析手法が開発されている[6]が、ここではイメージを測定する方法として一般的に用いられる SD（Semantic Differential）法を援用した指標を作成することを念頭に調査を行う。

2. 目的

本研究の目的は、在学地域に対する大学生の SC と、その変化を明らかにする尺度開発に向けた予備的検討を行うことである。そのために、大学生がそもそも在学地域に対してどのようなイメージを持っているのか、どのような機会に地域と感情的なつながりを持つのかについて、既往研究により明らかになっている SC の構成因子に関連する項目を取り上げ、大学生の地域コミュニティに対する態度を検討する。

3. 方法

調査は 2019 年 9 月から 10 月にかけて、本学の一般選択科目、及び専門選択科目の受講生 176 名に対して行った。担当教員が授業後、受講生全員に調査票を配布し、任意で協力を求めた。

調査項目は（a）属性、（b）山陽小野田市のイメージ*1、（c）地域のイベント・ボランティアへの参加意思・行動、場所、内容*2、（d）アルバイト活動の従事頻度、場所、業種、アルバイト先で学外の人と仲良くなったか*3、（e）居住地への居心地の良さ、その理由*4、（f）好きな場所の有無、その具体的な場所と理由*5、である。

これら項目の選定にあたって、（b）イメージは、SD 法*6 を援用した指標を作成することを念頭に置いた。地域の（c）イベント参加・ボランティア活動のうち、イベント参加は井上・久田（2015）[9]を、ボランティア活動は石盛ら（2014）[14]を参考にした。（d）アルバイト活動は鈴木・藤井（2008）[15]を、（e）居心地の良さは井上・久田（2015）[9]を、（f）好きな場所は鈴木・藤井（2008）[15]を参考にした。

4. 調査結果

任意で協力を求めた結果、74% の学生から回答を得た（配布数 176、回答数 130）。回答者の属性は、学年は 2 年生が 99 名、1 年生 31 名、性別は男性 109 名、女性 20 名、無回答 1 名であった。現在の居住地は、山陽小野田市が 70.0% と多く、高校まで住んでいた地域は、その他が 90.8% と多い（図 2）。

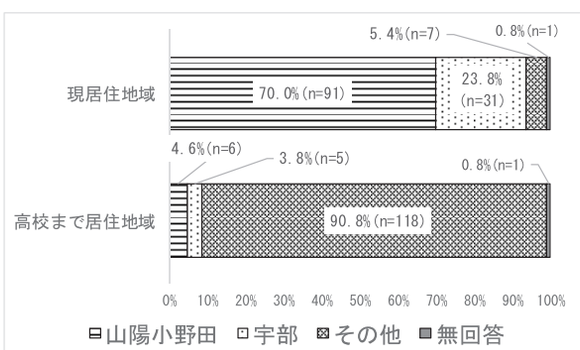

図 2　現在及び高校までの居住地

学生から得た山陽小野田市のイメージに関する具体的回答をもとに分類し、回答数について比較した（表 1）。「自然豊か」「気候」などの自然環境に関わる記述、「交通」「田舎」「道路」「商業施設」「産業・工業」「道路」といったことに関する記述が多かった。自然環境、自分の飲食や娯楽、交通といった身の回りの生活環境に関わる記述が多かった。

地域イベントへの参加意思は、参加したい（とても、どちらかと言えば）という回答割合が 33.9% あった（図 3 イベント）。実際にイベントに参加した学生は 56.9%（n=69）であり、山陽小野田市のイベントに参加している割合が高く（78.4%、n=58）、参加したイベントの種類はお祭りが多かった（64.9%、n=48）。

イベントの参加理由は、部・サークル活動の一環、ボランティアをするための参加が多かった。不参加理由は機会・時間・情報の不足であった。

地域のボランティアへの参加意思は、参加したい（とても、どちらかと言えば）、という回答割合が 37.7% であった（図 3 ボランティア）。実際にボランティアに参加した学生が 41.5% であり、山陽小野田市内でボランティアをしている割合が高く（83.3%、n=45）、地域活性化に関するボランティア活動が多かった（51.9%、n=28）。ボランティアへの参加理由は、部・サークル活動、大学のボランティアに関する単位取得のためが多かった。不参加理由は、機会・時間・情報の不足であった。

アルバイトをしている学生は、69.2% を占め（図 3 アルバイト）、アルバイトに従事する場所は山陽小野田市内が 52.2%（n=47）、宇部市内が 51.1%（n=46）で、従事したアルバイトの種類としては飲食店が多かった（57.8%、n=52）。アルバイト先で学外の人と仲良くなった学生の割合は 79.8%（n=83）であった。

現在の居住地に居心地の良さ（とても、どちらかと言えば）を感じている学生は、61.1% であった（図 3 居心地）。山陽小野田市在住の学生（n=91）に限ると、居心地が良い（とても、どちらかと言えば）という回答割合は 51.7% であった。居心地が良い理由として静かさ、環境（自然や夜景）の良さ、友達といった仲の良い人の存在が挙げられていた。居心地の良くない理由には、交通が不便、夜道が暗い、買い物や遊ぶ場所が少ない、があった。

現在の居住地に好きな場所があるかについては、好きな場所がある（とても、どちらかと言えば）の割合が 29.2% であった（図 3 好きな場所）。山陽小野田市在住の学生（n=91）に限ると、好きな場所のある割合は 28.6% であった。好きな場所として、自然（海・海岸）、自宅や友達のいるところが挙げられていた。好きな理由は、海が好き、きれいだから、であった。

さらに地域のイベントとボランティアの参加意思のクロス集計をするとともに、χ 二乗検定を行った。分析には IBM SPSS Statistics（ver.24）を用いた。その結果、イベントに「1 とても参加したい」、「2 どちらかと言えば参加したい」、「3 どちらでもない」、「4 どちらかと言えば参加したくない」と回答した学生は、ボランティアについても同じ程度の回答を選択している割合が高かった。ただし、イベントは「5 まったく参加したくない」と回答した学生も、ボランティアは「4 どちらかと言えば参加したくない」を選択する割合が多かった。

また、アルバイトへの従事経験を有する学生（n=90。アルバイトを週複数回、週 1 回、したことがある学生の合計）と経験していない学生（n=26）との間に属性や調査項目に違いがあるかを、マン・ホイットニーの U 検定により分析した。その結果、アルバイトへの従事経験を有する学生は経験を有しない学生に比べて現在の居住地域に対して、より居心地が良いと感じていた。

5. 考察

山陽小野田市に対する学生のイメージに関する調査結果から自然環境については、おおむね肯定的もしくは中立的な回答が多かったが、「交通」「道路」「商業施設」「娯楽施設」に関しては「交通が不便」「遊ぶ所が少ない」などの否定的回答が多い。

イベントとボランティアの参加意思の程度には類似性が見られた。自由回答から、部・サークル活動、単位のためにボランティアに参加している様子が伺えた。アルバイト従事場所は、山陽小野田市内と宇部市内の割合が 50% 程度で拮抗しているが、イベントやボランティアについては山陽小野田市内での参加割合が高い。このことからも、部やサークルの活動の一環か大学の単位取得のためのボランティア活動として、イベントに参加していたと考えられる。

アルバイトへの従事経験を得ることで、居心地が良いと感じる程度が高くなっていた。地域に対する感情的な部分に、人とのつながりが、影響を及ぼしていると考えられる。

表１　山陽小野田市のイメージ

カテゴリー	具体的回答例	回答数
自然豊か	「自然豊か」「緑が多い」	57
具体的自然	「海」「山」「虫が多い」	30
気候	「気候が温暖」「風が強い」「天気が良い」	21
災害	「災害が少ない」	3
商業施設	「店の閉店が早い」「サンパーク」「飲食店が少ない」	34
娯楽施設	「遊ぶ所が少ない」	15
産業・企業	「工業」「工場が多い」「セメント」「中途半端に発展」	34
大学	「大学」「学生が多い」「理科大生にやさしい」「大学の近くに何もない」	13
交通	「交通が不便」「電車がない」「交通マナーが悪い」	67
道路	「道が悪い」「道が広い」「歩道が狭い」	22
治安	「治安がいい」「治安悪い」	6
物価	「ガソリンが安い」「田舎の割に物価が高い」	6
静かな環境	「静かなところ」	9
夜の暗さ	「暗い」「街灯が少ない」	14
田舎	「田舎」「田舎すぎる」「ほどよく田舎」「何もない」	51
名前	「市の名前が長い」	4
イメージカラー	「オレンジ色」	8
地理	「都会に遠いようで近い」「宇部と下関の間」「意外と大きい」	7
市の特徴	「合併している」「福祉がしっかりしている」「レノファ山口に会える」	5
人口	「お年寄りが多い」「人が少ない」「少子高齢化」	14
市民	「元気な方が多い」「人が温かい」「やさしい」「親切」「冷ややか」	13
住環境	「不便」「環境がいい」「生活しやすい」「住みやすい」「居心地がよい」	15
その他	「明るい」「地味」「さびれている」「よくわからない」	41

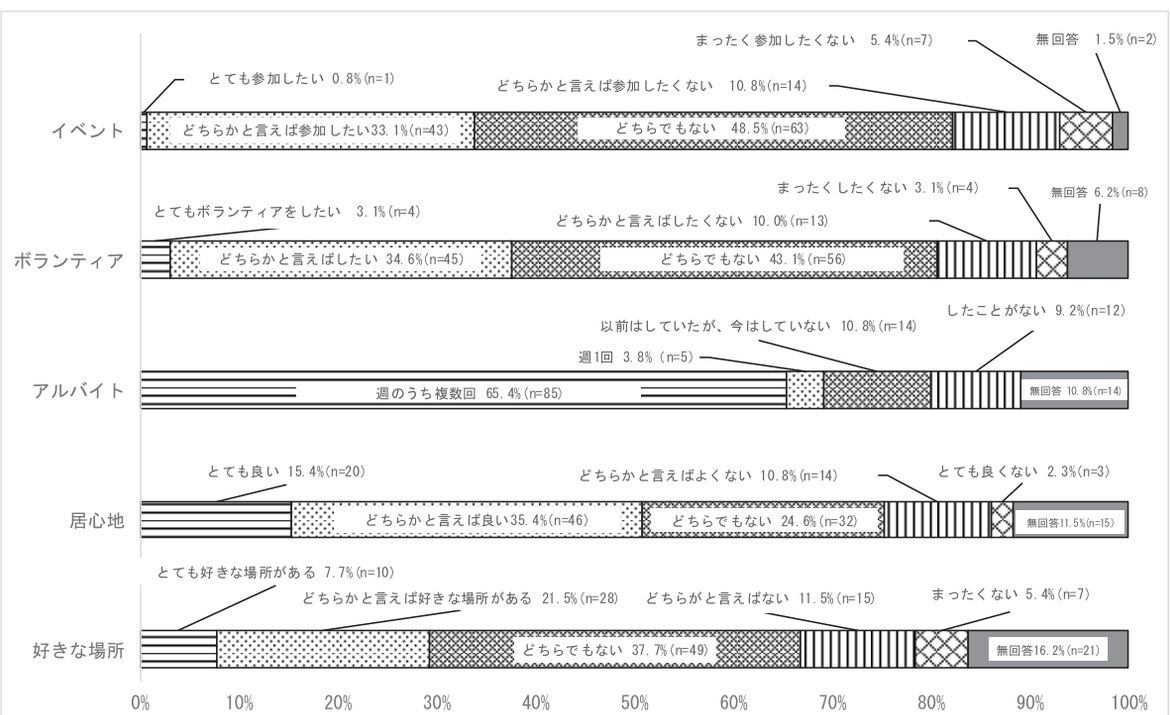

図３　イベント・ボランティア参加意思、アルバイトの従事頻度、現居住地の居心地、好きな場所の有無

表２　地域のイベント参加意思とボランティアの参加意思のクロス集計

			地域ボランティアの参加意思					
		N	1 とても参加したい	2 どちらかと言えば参加したい	3 どちらでもない	4 どちらかと言えば参加したくない	5 まったく参加したくない	合計
地域イベントの参加意思	1 とても参加したい	1	100.0%**	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	2 どちらかと言えば参加したい	41	4.9%	63.4%**	29.3%**	0.0%**	2.4%	100.0%
	3 どちらでもない	60	0.0%*	31.7%	61.7%**	6.7%	0.0%*	100.0%
	4 どちらかと言えば参加したくない	14	0.0%	0.0%**	42.9%	42.9%**	14.3%*	100.0%
	5 まったく参加したくない	6	16.7%	0.0%	16.7%	50.0%**	16.7%	100.0%
	合計	122	3.3%	36.9%	45.9%	10.7%	3.3%	100.0%

χ二乗検定の結果として1%水準で有意：＊＊、5%水準で有意：＊

6. 成果と今後の課題

本研究は、在学地域に対する大学生の SC と、その変化を明らかにする尺度開発に向けた予備的検討を行うことを目指した。その観点から、次の成果があったと考えられる。まず、学生が抱く山陽小野田市に対するイメージから、学生と地域との関係について質問文では測りにくい指標を検討する情報が得られた。また、学生の地域への関与形態として、イベント参加とボランティア活動がほぼ一体となっていることが分かった。そのため既往研究で取り上げられた指標を、本学に合わせて項目を精査し、修正する必要があると考える。具体的には、部・サークル活動の一環として、もしくは大学の単位取得のためのボランティア活動としてイベントに参加していることが推定された。今後の調査においては、イベント参加の質問項目を削除し、自発的なボランティアとそうでないものを区別するような項目を設定する。ただし課題も残された。イメージの調査において、アルバイト活動やボランティア活動で地域の人たちと関わることが多い人と、そうではない人とでイメージに違いがあるかなど、他の回答との比較についてはこれからの課題である。

本研究の成果から、今後はコミュニティ感覚の変容を分析するための測定尺度を本学の実態にあわせて作成する予定である。その尺度を用いて、地域ボランティア活動、アルバイト活動、地域科目受講などによる大学生の地域コミュニティに対する態度の変容を調査し、分析したいと考えている。

注釈

1　5 つほど挙げてもらうように依頼し、自由記述で回答を得た。

2　イベント・ボランティアへの参加意思・行動は、5 件法：1 とても参加したい→5 まったく参加したくない、で回答を得た。参加場所は、山陽小野田市、宇部市とそれ以外を聞いた。イベントの分類について、イベント情報が掲載された Web サイト（イベントバンク　プレス Web サイト：https://www.eventbank.jp）を参考に、ボランティア活動の分類については、ボランティア参加者の募集に関する Web サイト（Yahoo! ボランティア Web サイト：https://volunteer.yahoo.co.jp/）を参考に選択肢を検討した。

3　アルバイトの従事頻度は、5 件法：1 週に複数回している→したことがない、で回答を得た。従事場所は山陽小野田市、宇部市とそれ以外を聞いた。アルバイトの業種については、アルバイト募集の Web サイト（Townwork Web サイト：https://townwork.net/tokyo/）を参考に、選択肢を検討した。アルバイト先の人と仲良くなったかについては、5 件法:1 とても仲良くなった→5 まったく仲良くならなかった、で回答を得た。

4　現在の居住地への居心地の良さは、5 件法：1 とても居心地が良い→まったく居心地が良くない、で聞き取った。理由は自由記述で回答を得た。

5　現在の居住地に好きな場所があるかは、5 件法：1 とても好きな場所がある→まったくない、で聞き取った。具体的な場所とその理由については、自

由記述で回答を得た。

6　SD 法とは、重い－軽いといった形容詞対に対して、非常に重いから、非常に軽い、までの 5 件法で回答を得る。これにより、回答者が対象に抱くイメージを測定でき、それが回答者による類似・相違を明らかにできる調査方法である[16)]。

引用・参考文献

1）日本学術会議地域研究委員会人文・経済地理学分科会・地域情報分科会：提言　人口減少時代を迎えた日本における持続可能で体系的な地方創生のために ,2017.

2）中村高昭：地方創生における大学の役割－期待の一方、厳しさを増す大学を取り巻く環境－, *立法と調査* , 371,30-40, 2015.

3）文部科学省：まち・ひと・しごと創生総合戦略（平成 26 年 12 月 27 日閣議決定）,2015

4）宮町良広 .：地方創生の推進と地方　大学の役割 . *開発こうほう* , 653, 10-14, 2017.

5）Sarason,S.B.: *The psychological sense of community*: *Prospects for a community psychology*,Jossey-Bass,1974,157.

6）藤原武弘：コミュニティ政策への社会心理学的アプローチ , *コミュニティ政策* ,3,66-84,2005.

7）McMillan,D.W. & Chavis, D.M.: Sense of community :A definition and theory, *Journal of Community Psychology*, 24, 381-394.

8）池田満：大学生の心理的コミュニティ感覚：日本と韓国の異文化間比較 , *国際基督教大学学法* , Ⅰ-A, 教育研究 ,48,151-160,2006.

9）井上麻衣・久田満：大学生における所属大学へのコミュニティ感覚：測定尺度の開発と関連要因の検討 , *上智大学心理学年報*, 39, 53-60,2015.

10）笹尾敏明・小山梓・池田満：次世代型ファカルティディベロップメント（FD）プログラムに向けて－コミュニティ心理学的視座からの検討 , *国際基督教大学学法* , Ⅰ-A, 教育研究 ,45,55-72,2003.

11）野中雅人・服部ユカリ：大学病院に勤務する看護師の職場コミュニティ感覚と看護師長の変革型リーダーシップとの関連 , *日本看護科学会誌* , 39,108-115,2019.

12）大鐘啓伸：地域における子育て支援活動への“コミュニティ感覚”を取り入れた関与 , *名古屋女子大学紀要. 家政・自然編 , 人文・社会編* , 62,91-104,2016.

13）福島里美・鵜養美昭：臨床心理行政の授業が女子大生の地域コミュニティに対する態度に及ぼす影響 , *コミュニティ心理学研究* , 17(1), 46-62,2013.

14）石盛真徳・岡本卓也・加藤潤三：写真による高齢者の地域生活把握の試み－写真・ナラティブ誘出法による写真とナラティブの内容分析を中心として , *コミュニティ心理学研究* , 18(1), 42-57,2014,

15）鈴木春菜・藤井聡：地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究 , *土木計画学研究・論文集* , 25(2), 357-362, 2008.

16）大竹恵子・三浦麻子：*なるほど！心理学調査法（心理学ベーシック 第 3 巻）*, 北大路書房 , 京都 , 2017, 96-104.